

実践的推論における情動の役割

西堤優 (NISHITSUTSUMI Yu)

東京大学

私たちは日常生活の中で、様々な事柄を比較衡量した上で行動を選択することがある。たとえば、空港に行く際、移動手段として電車とバスの二つがあったとしよう。バスの方は一旦乗ってしまえば空港まで乗り換えなくてよいという利点があるが、渋滞に巻き込まれて時間通りに到着できないかもしれないという不利な点がある。一方、電車の方はよほどのことがない限り時間通りに着くという利点はあるが、重い荷物を抱えて複数回乗り換えなければならないという不利な点がある。諸々の事情を比較衡量して、最終的に時間通りに着くことが最優先であると判断し、電車で行くことにする。このような実際の行為に結びつくような推論は、信念を形成する理論的推論とは別に、実践的推論として広く知られているものである。従来、このような推論をうまくやるには、つまり、合理的な選択を実現させるためには、理性を働かせ、情動に屈しないようにすることが必要であると考えられてきた。だが、昨今の情動に関する科学的成果によると、合理的な選択をするためには実は情動が不可欠であることが示唆されている。本発表では、こうした科学的成果を取り込みつつ、実践的推論において情動が非常に重要な役割を果たしていることを論じる。

特に、情動が私たちの実践的推論をいかに合理的なものにしうるのかに注目しながら考察を行う。そのための準備として、まず、認知に関する心理的なモデルとして提唱された二重システム理論の枠組みのもとで情動と理性がどのように捉えられるのかを確認する。ここでは情動と理性の関係をシステム 1 とシステム 2 の関係として捉え、システム 1 とシステム 2 がどのように相互作用して実践的推論が行われるのかを見ることで、情動が実践的推論においてどのように働くかを明らかにする。次に、実践的推論における情動がいかに合理的でありうるのかについて、B. W. Helm の情動論を参照しつつ分析を行う。Helm によると、情動とは「合理的なパターン」に属するがゆえに本来的に合理的なものであり、それゆえ、合理的なプロセスである実践的推論を理性と協働して支えることができるのである。その上で、そのような合理的な情動が、実践的推論において具体的にはどのような役割を果たすのかを検討する。情動の一つの役割として、A. R. Damasio による前頭前野腹内側部損傷患者の研究などから、比較衡量の対象となる選択肢を絞り込む段階において、情動が合理的な役割を果たしうることはよく知られている。しかしここでは、それだけではなく、実践的推論が行われている最中にもそのような合理的な情動がその一要素として働いて、実践

的推論を合理的なものにするのに貢献していることを二重システム理論の枠組みの中で論ずる。本発表では、以上を通じて、実践的推論において情動が演じる役割を考察する。

主要参考文献

Helm, B. W. (2010). Emotions and Motivation: Reconsidering Neo-Jamesian Accounts. In P. Goldie (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*. Oxford: Oxford University Press.